

論 壇

今こそ母子保健の底力を ―「子どもの生活習慣対策委員会」の挑戦―

名護療育園

勝 連 啓 介

ある日の午後、某市の要保護児童対策地域協議会（子ども虐待対策の会議）で、「えっ、あのAちゃんのお母さんが朝ごはんで菓子パンを食べさせるようになったんだ。成長だね。」と、親子の変化を委員間で共通認識しました。その日の夜、沖縄県小児保健協会の子どもの生活習慣対策委員会で、「きちんと三食食事を摂りましょうと啓発したいですね。食事のバランスも考えると、朝食に菓子パンなどは好ましくありませんね。」と、長寿県復活を目指すための委員会での意見は正論の主張です。

これは両極端な話題ですが、私たちが関わる親子（対象者）の置かれている環境は様々で、支援する側は、価値観の多様性を理解しつつ支援することが求められる難しさがあるように思います。

ある保育所の先生に聞いた話です。朝の遅刻が常習のBくん親子。一見して、お風呂に入っている様子はなく、朝食も欠食で登園していました。それがある日の朝、コンビニの菓子パンを食べながら登園してきたそうです。迎えた保育士は、最初、朝ごはんの内容に注目し、母親へアドバイスしようと思ったようですが、それを抑え、「Bくん、きょうはパンたべてきたの。おかげでいちにちがんばれるね。おかあさん、ありがとうだね。」と、お母さんがとった行動（朝ごはんを与えた）を誉めました。母親と保育士の関係が築かれた瞬間だったのではないのでしょうか。そうして母親の立ち上がりを信じて待つ。それも親子を支える保育実践なのかもしれません。子どもの生活習慣対策を講じることは、福祉の課題への挑戦でもあると思います。

沖縄県が全国に誇る医療のデータがあります。救

急医療体制の充実です。県医師会統計によると、年間の救急搬送件数58,183件のうち、その病院で診療ができずに改めて別の病院に転送されたのはたったの27件（0.05%）で、全国平均の0.7%と比較すると、日本有数の実績です。沖縄県は医師数が多く十万人あたり241.1人（全国平均は237.8人）と報告されています。注目すべきはその増加率で、平成12年比での増分は54.1人で全国トップです。しかも、医学部卒業後に臨床研修医が希望する病院で研修できる確率（マッチング率）は非常に高く、毎年全国上位のようです。しかし、このような医療の充実があるにもかかわらず、平成12年の平均寿命は男性26位へ（26ショック）、平成22年の平均寿命は女性が1位から3位へ、男性は30位へ急落しました（これを330ショックと表現しています）。65歳未満の死亡率は男女ともに全国一で、その原因は、急性心筋梗塞、脳血管障害、糖尿病、自殺と続きます。県民の中高年層の早世阻止、働く世代のメタボ対策は喫緊の課題です。それゆえ県医師会の「おきなわ津梁ネットワーク」、官民71団体で構成される「健康長寿おきなわ復活県民会議」、県健康長寿課の「健やか親子おきなわ」、報道機関に起因する「イチキロヘラス」運動で県民啓発を目指すなどの緊急対策の挑戦が進んでいます。

また、子ども自身が主体的に健康な生活習慣を身につけていけるようになることが長寿県復活の根幹であるとの考えのもと、昨年7月に沖縄県小児保健協会理事会の提案によって「子どもの生活習慣対策委員会」が発足しました。現在、周産期・食育・歯科・生活関連・運動遊びの5つの小委員会が設置さ

れて議論が進められています。子どもたち自身の責任とするのではなく、いつどこで誰と生活習慣を学び、どう実践すれば良いのか、大人がきちんと示していく必要があることを委員会から発信していければと思います。

福祉の課題と向き合い、医療と保健をつなぎ、次

世代育成を最大の目標として、今こそ沖縄の母子保健の底力を発揮すべき時だと思います。沖縄の子どもたちの暮らしの本質が未永く保障され、20年のちに、今の挑戦のおかげで沖縄の子どもたちは健康で幸せでいられる、と語り継がれることを願ってやみません。